

# 月報

<442号>

ケルン・ボン日本語  
キリスト教会  
二〇一八年九月三〇日発行

「忘れてはならない」

佐々木 良子

私たちは主なる神の豊かな愛と憐みの中で生かされ、日々必要な助けを十分に頂いております。ですから私たちが何処にいようと、何をしようと、神のご臨在の中で支えられている、という確信をいつも抱いているかという点、危ういものを感じます。

神さまの助けを必要としている際、主なる神は私たちに對して、理解に苦しむことを要求される事がしばしばあります。そのような時に多くの戸惑いや焦り、不信仰な感情が次から次へと湧き、「神さま、私が必要としている助けはこのようなことではありません、的外れではないですか? 何故、今、この時にこんなことをしないといけないのですか?」どんな意味があるのですか?」と、呟いてしまいます。

しかし、そのような苦しい体験を通して、必ず後から気づきを与えてくださいます。信仰とは戸惑いながら、永遠に変わることはない神の恵みを発見することから始まる、主イエスを実感させて頂けます。自分の思いに固執していた者が、主の御心を探し求めながら、養われてゆく幸いを少しずつ感じるようになるのです。

そこには一つの前提があるといつてよいと思います。主の御言葉を信じ、全幅の信頼をもって御言葉の中に生きることです。神のご臨在の中に生きる人といえるでしょう。主の御業も、御言葉も私たちの

ために存在し、神は御言葉を聖書の中で与えてくださっています。

ヨハネによる福音書の「カナでの婚礼」(二章一〜二節)に記されている主イエスの言動は、私たちに何を求めておられるのでしょうか。主イエスが自身も招かれて、弟子たちと共に、婚礼に出席した時の出来事です。喜ばしい婚礼の最中に、大切などう酒が底をつきました。そこで、マリヤは、主イエスに助けを求めました。

「ぶどう酒がなくなりました」(三節)

「婦人よ、わたしと、どんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」(四節)

期待とは裏腹に、大変冷たい言葉で突き放すように聞こえます。

更に、主イエスは召し使いたちに、理解し難いことを仰せになりました。「水がめに水をいっばい入れなさい」(七節)六つの水がめの全てに水を満たすようにお命じになりました。この水がめは、二ないし三メートル入りのものである(六節)とありますから、計算すると何と一〇〇リットル位入る大きな水がめで、しかも六つもあったのです。合計で六〇〇リットルですから、命じられた通りにするには、大変な労力と時を要します。

既にぶどう酒はないのですから、少しでも早く調達したいところです。どう考えても受け入れ難いことだと思えます。それでも召使いたちは主のお言葉に従って水を満たしたとき、主は続いて、「わあ、それを飲んで宴会の世話役のところへ持っていきなさい。」(八節)と仰せになりました。次から次へと難題を持ちかけられます。どこまでこの状態が続くのか、いったい主イエスは何を考えておられるのか、と思っても不思議ではありませんが、マリヤや召使いたちは、主イエスが命じられた通り実行しました。

旧約聖書のヨシヤ記六章には、エリコの城壁の陥落についての出来事が記されていますが、同じように主なる神は、私たちにどうして理解し難いことを命じられました。ヨルダン川と城壁に囲まれた約束の地・カナンの地の入り口にあるエリコという町を占領する際の出来事です。神の命令により六日間一度ずつ、契約の石版を入れた箱を担ぐ七人の司祭を先頭に、城壁に囲まれたエリコの町の周囲を廻りました。そして七日目に七度廻った後、ラッパを吹き鳴らし大声を挙げるといふ命令です。大の大人がそのような行進する風景を想像すると何とも滑稽な感じがします。しかし、実行することにより城壁は崩れ落ちました。

カナの婚礼、エリコの城壁陥落の出来事での共通点は、信頼の中に生き、神の救いの時が満ちるまで黙々と忠実に実行する者が、大いなる祝福を受けるということとです。納得できずに疑問を抱き、先がみえなくても信頼し続けることが、勝利の秘訣です。必ずその時がきます。主なる神は私たちの未来を既に保証してくださっています。

主なる神に信頼することは、信仰者の誰もが望んでいることです。聖書から信頼の中こそ祝福があることを知っているからです。信頼する心が私たちに力を与え、信頼と共に幸いが更に増すことを願っています。

「わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。」(詩編一〇三編)たとえ主の御計らいを忘れても、何度でも神の御言葉を思い起すことが許されています。繰り返して、繰り返して、思い起こさせてくださいます。私たちが神の言葉を正しく、永遠に変わらない言葉として受け止め続け、主なる神の新しい恵みを発見する者とさせて頂けたら幸いです。

春子さん、いっしょにっしょい。また会う日まで!



と絶句するばかりでした。しかし、春子さんにとって、神の時・最善の最期だったと現実を受けとめ、多くの方々と共にお見送りをいたしました。

《春子さんの歩み》

一九四四年四月一九日、横浜にて四人兄弟の二番目として誕生されました。若い頃はご苦労が多く、ご自身の思いを断念してお母様のレストランを手伝っていました。しかし、そこで一九六六年に店に足繁く通っていたカールハイイツ・ギョトゲマンさんと出会い結婚されました。本来ならご主人と長女アニタさんと日本に住む予定でしたが、手続きが整わずにやむを得ずドイツ・ボンへ一九六七年、シベリア鉄道にて二週間かけて引越しました。ボンでは次女のモニカさん、三女のマリコさんを出産され、やがて生活にも馴染み、ドイツを郷里と感ずるようになりました。

スポーツ万能で特にバレーボールが好きでしたが、一九七七年以降は空手を始めて家族全員が黒帯を取得し、その腕前は松濤館流空手二段で、国際大会でも活躍されたというほどでした。スポーツクラブ Fortuna Bonnの空手部長を務め、トーナメントやバーベキューなどを企画しました。一方、料理やお菓子作りが大好きで、人を招待してご馳走することに幸せを感じていました。

明るく優しく、愚痴も言わない彼女は人気者で全ての人に好かれ、自分のことよりも他人のことを気にかけて、最後まで人のために尽くしました。お孫さんができてからは献身的に面倒をみて、お孫さんからも愛され、慕われ、お孫さんのことを誇りに思っていました。

また最近の五年間は、お孫さんの面倒をみると共に彼女の住むマルガレーテ・グランドマン・ハウスに於ける多種の催しに貢献し、何をすることも一生懸命でどこにいても存在感のある方でした。亡くなられた時は、居住されている所で夕食の手伝いをしていて最中にエブロンをつけたまま倒れ、そのまま息を引取られました。春子さんの死は早過ぎましたが、彼女らしい潔い最期でした。

《教会での最近の春子さん》

お嬢様のモニカさんは春子さんについて、ケルン・ボン日本語キリスト教会はとても居心地がよく、ここ数年の間、再び定期的に通うようになり母国語を話す機会が増えたと仰っていました。また毎年のバザーも楽しみの一つだったそうです。得意のケーキやクッキーを沢山焼いて、元気に販売していたお姿は誰もが心に残っていることと思います。



ボンのご自宅から教会まで、バスや電車を何回も乗り継いで遠い距離でしたが、いつも大きなキャリアバッグに美味しい手作ケーキやパン、料理を沢山持ってきてご馳走してくださり、更にお土産まで持たせてくださいました。礼拝で説教を聞いた後、「今日の聖書の御言葉で慰められた、また希望が持てた。教会にきてよかった。元気が出た!ありがとうございます」とよく仰っていました。春子さんのパワーの源は聖書の御言葉だったのでしょうか。

《これからの春子さん》

生前に「アツという間に天国に行きたい」と願っておられたそうで、正にその通りの最期でしたので満足しておられるでしょう。あのパワフルな大阪弁で「お先に!天国でな!」と大きな声で私たちを励ましてくださっていると思います。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

(ヨハネの黙示録二二章三〜四節)

春子さんはこの世で多くの方々に愛され、慕われていましたが、人知れず多くの苦労や涙があったと思います。しかし、今はこの世の全てのことから解放されて、神の御許に旅立られ「善かつ忠なる僕、よくやった」とお褒めの言葉を頂きイエス・キリストと結ばれておられると確信しています。これまでの尽きせぬ感謝を込めて、また会う日まで! (佐々木良子牧師)

《追悼のお言葉》 文中抜粋

◆牧田吉和牧師・悦子姉(元、ボン日本語キリスト教会牧師・日本キリスト改革派縮毛教会牧師)

春子さんは開拓間もないボン日本語教会にとっても、また個人的には私たち家族にとっても、本当に大切な人でした。彼女なくして、当時のボン日本語教会の働きは成り立たなかつたと思います。私たち家族にとっても、お互いの子供たちの年令も近く、二つの家族はまるでひとつの家族のように過ごしました。本当に楽しく幸せな時を過ごさせていただきました。あの頃が、春子さんの最も幸せな一つの時代ではなかつたかと思えます。

その後、しばらく教会から離れる時期もありました。しかし、晩年はケルン・ボン日本語教会で教会生活を回復し、教会の皆様との親しい交わりが与えられ、彼女の喜びと慰めの場になっていたことは本当に感謝なことでした。残されたご遺族の皆様の上に、神が豊かな支えと祝福とを与えてくださるようにお祈りいたします。

◆稲葉一牧師(日本キリスト教会柳川教会牧師)

春子さんご家族との交わりは私たちにこりまして、ケルン・ボン教会の家族同様に魂のふるさとでありまして、いつも心はつながっています。思えば、四〇年

前に、春子姉のエネルギーな生きる力により私たち家族も弱さの中で励まされました。いつも心にあの時の交わりを宝物として思い起こしています。それにしても、生きる時も死ぬときも主にあってエネルギーがシユな旅立ちですね。敬愛なる春子さん。安らかに。復活の主によりたのむのみ

◆松原弘信兄(元、ケルン・ボン日本語キリスト教会員)  
二度にわたる渡独のなかで春子さんにも本当にお世話になり、妻もシヨックを受けています。遠く熊本から、妻と子どもあめあめの穏やかな顔をされた春子さんのことを偲んでいます。

### 第三回ヨーロッパ・キリスト者の集い

ピシヨッフ・ウヴェ

初めてキリスト者の集いに参加しました。集いが始まる二週間前にイギリス入りして数日間ロンドンに滞在し、その後はレンタカーを借りて移動することにしました。レンタカーを借りて、まずストーン・ヘンジを訪れることにしました。車を走らせていくと、何もないうだだっ広い野原に不思議な石の集まりが、まだ遠い所からでも見えてきました。ピジター・センターでオーディオガイドを借りて説明を聴きながら、ゆっくりと石柱群の周りを一周しました。オーディオガイドの説明によると、石柱近くにある小さな穴は葬儀のために使われたそうです。驚きました。ストーン・ヘンジは墓地だったのでしょうか？春分の日などの太陽の動きを測るための場所だけではなかったのでしょうか？「春に生命の始まり」と「葬儀に生命の終わり」は、同じ場所で行われていたということなのかと想像しました。太陽を神だと信じていた古の人も、死んでからもなお神の近くにいたいことを望んだのかもしれない。その見知らぬ昔の人のように、ストーン・ヘンジに特別な魅力を感じました。

ストーン・ヘンジを離れた後は、美しいコッツウォルズや湖水地方へと、イギリスの美しい景色を楽しみながら北上して行き、ついに旅の終着点エディンバラに到着しました。

集いが始まって、最初の朝食の時間。集いの会場となった大学キャンパスのカフェテリアの雰囲気は、学生時代に在籍していたケルン大学の食堂を思い出しました。空いている席に座って、隣の方に挨拶をしました。その日隣に座っていた方と、食事をしながら会話を楽しみました。その方からハブル語の文字について興味深いことを聞きました。文字数は二四文字だけで母音はありません。母音の代わりに子音に点をつけることによって、発音を変化させるそうです。

この小さな会話の中にも「変化」のテーマが出てきました。小さなことでも大きな出来事でも、人生に変化が伴います。突然雷が鳴り響くように神様の声を聴いてクリスチャンになった方の証を、驚きながら聴きました。ドイツ語によるスモールグループでも、僕と同じように妻に連れられて日本語の礼拝に参加するようになつてから、子どもの時から持っていた種がやっとな芽生えたという証も聞きました。変化の時は主の手があり、適切な時にやってきます。急変化でも、時間がかかる変化でも。変わらないものは神のみことばであり、聖書は真つ直ぐな道を教えてくれます。

大英博物館にあるロゼッタストーンに書いてある三種の言語のように、人間の言葉は変わります。時代や文化も変わります。ただ周囲の変化に反応するだけではなく、成長する必要がある。スモールグループで話し合ったように、主から新しい使命が与えられたら、それに必要な能力は必ず与えられます。主が成長するために必要な物を与えてくれます。それを信じることも信仰の一部です。初めてキリスト者の集いに参加しました。たくさんの方が一堂に集まって、様々な経験をした方との話ができて、印象深い集いでした。

ピシヨッフ 聖歌

今年のヨーロッパキリスト者の集いは、私にとって初めて参加した集いでした。私は日本では小学校六年生の年ですが、集いの翌日から始まる新学期から七年生になるので(中学一年生)、中高校に入れてもらいました。中高校のプログラムは、大人のプログラムからほとんど全部が切り離されて独立していました。最初、中高校のみんなが集まった時はほとんどの子たちがお互いを知っていたので、新しく入って来た私に友達ができるか不安でしたが、みんなすくよくよく優しくてすぐに馴染めました。一番仲良くなったのは、ミュンヘンの日本語教会から参加していた同い年の女の子です。その子も今初めて集いに参加していました。集い中はお父さんやお母さんの所にほとんど行くことなく、ずっとその子と一緒に行動していました。

最初の夜は、「ナツちゃん」が(中高校では、みんなこう呼んでいました。本当の名前はナタナエルさん。日本で長い間働いていたドイツ人宣教師の息子さんで、日本語が一つでも、ちょっと方言が入っています。一日本人のようにものすごくよくできます)が、「あなたのみことばは、私の足のともじび、私の道の光です。」(詩篇一九：一〇五)という聖書箇所から、神様が私たちの道を照らしてくださいとお願いし、神様が私を見えなくて迷ってしまっけれど、神様が道を照らしてくださいから迷った時も光の方に戻って行けるということを見せてくれました。

二日目の朝食の後、服部先生が「神の道があるとは？」という題でメッセージをしてくれました。自分の子供時代の話を聞いて、家族に暴力をふるったお父さんのことを憎いと思う自分を神様によって変えられたことを話してくれました。そんな難しい家族関係の中で育っていても、今は神様のことをみんなに伝える牧師になった服部先生の話を聞いて、神様の力ってすごいなと感動しました。キリスト者の集いの中で一番心に残ったのが、このお話でした。その日の午後のエディンバラ市内観光では、私たち中高生は丘(後で「アーサー王の玉座」という名前がついていることがわかりました)に登りました。実際登ってみると見た目よりもずっと急な坂で、帰ってきた時はみんなハトハトでしたが、丘の上からエディンバラの綺麗な景色を見

ることができたので、頑張って登ってよかったです。

三日目は、昼食の後に、みんなが楽しみにしていたお楽しみ会がありました。そこで、国旗クイズや写真ゲームをしました。三つのチームに分かれて、それぞれのクイズやゲームでポイントを集めていくゲームでした。どのチームも全力で頑張りましたが、私のチームが一番点数が少なく負けてしまいました。それでも私にとってはとても楽しいイベントでした。そして夜には佐々木先生が「神とともに歩む道」という題で、エジプトに売られたヨセフの話をしてくれました。希望をなくすような人生を送っていたヨセフにも神様は彼の立場をよくしてくださったように、神様は誰のことも見捨てることのないことを教えてもらいました。

最終日、中高校の聖日礼拝で、加藤先生が「みんなが十字架に立った時に、悪魔の誘惑に負けないように、みことばを武器として使って正しいイエス様への道を行くように。」と教えてくれました。私もそれができるように、みことばを貯めたいと思います。私にとってはこの四日間は楽しいことや素晴らしいことがたくさんあって、あっという間に過ぎてしまいました。キリスト者の集いが好きになりました。

◇ 報 告 ◇

◇七月一日(日)「Strassenfest(教会通りのお祭り)」があり、ボンハッファー教会との合同礼拝後、日本食コーナーを出店しバザーに参加しました。今年の会場はカトリック教会で、Krieler Dörnchen 周辺を皆で行進してから、Suibert-Heimbach-Platzで行われました。

◇八月二日～五日にエジソンバラにて行われた第三五回ヨーロッパ・キリスト者のつどいには、佐々木牧師とシユミット亜弥子役員が参加しました。

◇ギユッゲマン春子姉追悼式が九月二日(日)礼拝の中で行われ、在りし日の姉妹を偲びました。また、告別式・埋葬式は九月一日(火)Kapelle Friedhof Poppelsbornにて、佐々木良子牧師の司式により執り行われました。多くの方が参列され、天国での再会を約束しました。

ました。

◇九月六日(日)にボンハッファー教会との合同礼拝・聖書の食事があり、ドイツ教会の二人の子どもの洗礼式が執り行われ、ゴスペル賛美グループが華を添え活気づけられました。

◇外国語教会夕礼拝が Antonier kircheにて九月三〇日(日)に行われました。

◇ 予 告 ◇

一〇月三～二五日 日本基督教団総会(日本)  
佐々木牧師宣教報告の為に出席

十一月五～八日 欧州教職者研修会  
南ドイツ

十一月二日(日) 創立四一周年記念礼拝

バザーのお知らせ  
11月1日(木・祝日)  
13時～16時

場所: ボンハッファー教会

日本食と喫茶、蚤の市が皆様のご来場をお待ちしています! 収益は、ディアコニー「世界にパンを」へ献金いたします。

ボランティアを募集!

①商品の値付け、②会場の設営や撤収、③日本食、ケーキなどの提供(材料費は当方で負担します)、④当日の販売補助、⑤その他  
詳しくは牧師まで

クリスマスペーシエント礼拝&祝会

日時 十二月二六日(日) 一四時～

※礼拝後祝会

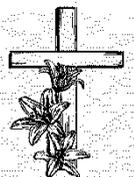


初めての試みとして、子どもと大人一同でイエスさまのご降誕劇をします。どうぞお楽しみに!

※祝会に参加される方で、可能な方は五ユーロ位の交換プレゼントを準備して頂けると幸いです。

◇ 編集後記 ◇

私はドイツでの宣教報告として、日本へ定期的に、ニュースレターを配信しています。今回は先日召されたギユッゲマン春子姉のことを紹介しました。奇しくも皆さまのお手元に送付された頃に春子さんは召されました。これも神さまのご計画だったのでしようか……告別式のときにもご紹介いたしました。この誌面をお借りしてご報告いたします。



「電車とバスを乗り換えて遠くからいらっしやる教会の姉妹は、献金するために得意なケーキを焼いて居住しているアパートの方々に時折販売しておられます。そのようにしてコツコツと貯めた売り上げ代金にお嬢様がプラスして、月定献金としてささげておられることを知りました。お母様の信仰の喜びがお嬢様に伝わっているのではないのでしょうか。これからも祝福が豊かにありますように……」

このような春子さんは、いつまでも私たちの教会の誇りでもあり、私の誇りでもあります。ご遺族の上に主の平安がありますように。(佐々木良子牧師)

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会  
Japanische Evangelische Gemeinde  
Köln-Bonn e.V.

〈主日公同礼拝〉

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche  
住所: An der Decksteiner Mühle 1  
50935 Köln (Lindenthal), Germany  
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)  
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

〈牧師〉 佐々木良子 (Pfr. Ryoko SASAKI)

牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln  
固定電話: 02234-9298792  
携帯電話: 0151-2910 6278  
Email: r310130s@yahoo.co.jp

〈ホームページ〉

http://koelnbonn.jp

〈振込口座〉

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38  
BIC: PBNKDEFF